とうがらし類

農薬取締法上、「とうがらし類」は、甘長とうがらし（万願寺とうがらし等）、かぐらなんばん、きだちとうがらし、ししとう、とうがらし、ハバネロ、ピカンテなどである。ピーマンは、「とうがらし類」には含まれない。

「とうがらし類」は、「ピーマン及びとうがらし類」、「なす科果菜類」、「野菜類」に適用のある農薬を使用すること。

とうがらしの葉を食用にする場合は、「とうがらし（葉）」、「葉菜類」、「野菜類」に適用のある農薬を使用すること。

—— 発病・加害時期
 === 発病・加害最盛期

作型・病害虫名		月											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普	通					▲ 定植							
疫	病												
う	ど												
炭	疽												
ウ	イル												
ア	ザミ												
ア	ブラ												
オ	オタ												
ネ	キリ												
ハ	スモン												
	コ												
	ス												
	マ												
	シ												
	コ												
	シ												
	ウ												

疫病

留意事項

- 1 降雨による土壌のはねあがりで伝染する。
- 2 QoI剤<< 1 1 >>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 土のはねあがり防止のため、敷わらなどでマルチングする。
- 2 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ぱれいしょ等）の連作を避ける。
- 3 被害果実、枝等は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 排水を良好にして過湿を避ける。
- 5 苗床、本ぽを土壌消毒する。（XⅢ土壌消毒 2土壌病害虫等を対象とした薬剤による土壌消毒（4）参照）
 - ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 <-> 【30kg/10a 定植21日前/1回】
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ランマンフロアブル](#) < 2 1 > 【2000倍 前日/4回】
 - ・ [ライメイフロアブル](#) < 2 1 > 【2000~4000倍 前日/3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ユニフォーム粒剤](#) <4> <<11>>
 - 【とうがらし類（除ししとう） 3g/株 株元散布 前日/1回】
 - 【ししとう 3g/株 株元散布 前日/3回】

うどんこ病

留意事項

- 1 高温乾燥時に発生が多い。
- 2 QoI剤<<11>>、SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 窒素過多を避ける。
- 2 発生が見込まれる時期、もしくは発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフェットフロアブル](#) <<7>> 【ししとう 2000倍 前日/3回】
 - ・ [ストロビーフロアブル](#) <<11>> 【とうがらし類（除ししとう） 4000倍 前日/2回】
 - ・ [トリフミン水和剤](#) <3> 【4000～5000倍 前日/5回】
 - ・ [ラリー水和剤](#) <3> 【4000～6000倍 前日/4回】
 - ・ [サンクリスタル乳剤](#) <->
 - 【野菜類（除なす、トマト、ミニトマト、しゅんぎく） 300～600倍 前日/-】

炭疽病（たんそびょう）

留意事項

- 1 温暖で雨が多いときに発生が多い。
- 2 病斑上の胞子が、雨等の水滴で飛散、伝播する。
- 3 種子伝染する。
- 4 QoI剤<<11>>、SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 排水を良好にし、施設栽培や雨よけ栽培に努める。
- 2 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングする。
- 3 窒素過多を避ける。
- 4 被害果実や葉は、早めに除去するとともに、被害株は収穫後、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ベンレート水和剤](#) <1> 【甘長とうがらし 2000倍 前日/3回】
 - ・ [スクレアフロアブル](#) <<11>> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [シグナムWDG](#) <<7>> <<11>> 【2000倍 前日/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

ウイルス病

留意事項

- 1 トマトモザイクウイルス (ToMV) トウガラシマイルドモットルウイルス (PMMoV)、タバコモザイクウイルス (TMV)、キュウリモザイクウイルス (CMV) 等を病原とするモザイク病や、トマト黄化えそウイルス (TSWV) を病原とする黄化えそ病などがある。
- 2 生育初期の感染による被害が大きい。

防除方法

- 1 苗床は寒冷しゃで被覆し、アブラムシ類の侵入を防ぐ。
- 2 アブラムシ類 (CMV)、アザミウマ類 (TSWV) の防除に努める。(アブラムシ類、アザミウマ類の項 参照)
- 3 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 ハサミ等で芽かきする際に、ウイルスが伝搬する可能性が高いので、発病株らしき株は芽かきを後回しにする (モザイク病)。

アザミウマ類

留意事項

- 1 主にミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマが発生する。
- 2 ミナミキイロアザミウマは果実に直接的な被害を生じる。ミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマはウイルス病を媒介する。
- 3 虫は葉裏、花、幼果 (へたの下) に多い。
- 4 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 5 アドマイヤー1粒剤の成分イミダクロプリドの総使用回数は3回以内 (但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内)。
- 6 スタークル顆粒水溶剤とアルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は4回以内 (但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内)。

防除方法

- 1 ほ場周辺の除草を行う。
- 2 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングする。
- 3 下記の薬剤を土壌施用する。
 - ・ [アドマイヤー1粒剤](#) < 4 A >
【1~2g/株 植穴または株元土壌混和 定植時/1回】
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

—とうがらし類—

- ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) < 4 A > 【2000倍 前日／2回】
- ・ [ディアナSC](#) < 5 > 【2500倍 前日／2回】
- ・ [プレオフロアブル](#) < UN > 【1000倍 前日／2回】
- ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 > 【2000倍 前日／3回】

アブラムシ類

留意事項

- 1 主にワタアブラムシ、モモアカアブラムシが発生する。
- 2 降雨が少なく、乾燥した条件で発生が多い。
- 3 アドマイヤー1粒剤の成分イミダクロプリドの総使用回数は3回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内）。
- 4 スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

- 1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングする。
- 2 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [アドマイヤー1粒剤](#) < 4 A >
 - 【1g／株 株元散布 育苗期後半／1回】または
 - 【1～2g／株 植穴または株元土壌混和 定植時／1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) < 4 A > 【3000倍 前日／2回】
 - ・ [アディオン乳剤](#) < 3 A > 【2000～3000倍 7日／2回】
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) < 9 B >
 - 【とうがらし類（除甘長とうがらし） 4000倍 前日／2回】
 - 【甘長とうがらし 4000倍 前日／3回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 > 【2000倍 前日／3回】

オオタバコガ

留意事項

- 1 広食性で、多くの作物を加害する。
- 2 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。

防除方法

- 1 幼虫による被害が大きいため、食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。
- 2 摘除した茎葉や果実、被害果にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し処分する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【2000倍 7日/2回】
 - ・ [コテツフロアブル 劇](#) <13> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【タバコガ類 1000倍 前日/2回】
 - ・ [フェニックス顆粒水和剤](#) <28> 【2000~4000倍 前日/2回】
 - ・ [BT剤](#) <11A> (IX野菜類の病虫害防除 3野菜類 参照)

ネキリムシ類

防除方法

- 1 地中の幼虫の捕殺に努める。
- 2 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダイアジノン粒剤5](#) <1B>
 - 【4~6kg/10a 全面土壌混和または作条土壌混和 は種時または定植時/2回】
 - ・ [ガードベイトA](#) <3A> 【3kg/10a 株元散布 7日/2回】

ハスモンヨトウ

留意事項

- 1 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プレバソフフロアブル5](#) <28> 【1000~2000倍 前日/3回】
 - ・ [アニキ乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [BT剤](#) <11A> (IX野菜類の病虫害防除 3野菜類 参照)

病虫害と間違いやすい生理障害

尻腐れ果

留意事項

- 1 果実の果頂部が褐変、黒変して壊死し、陥没した状態となる。
- 2 石灰欠乏に伴う生理障害である。
- 3 初夏の高温で乾湿の差が激しく、窒素質肥料の肥効が高い時に発生しやすい。

防除方法

- 1 堆肥を十分施すとともに、窒素質肥料の過用を避ける。
- 2 深耕し、保水力の強い土づくりに努める。
- 3 土壌の過乾過湿を防ぐため、ビニールマルチや敷わらなどを行う。
- 4 塩化カルシウム200~300倍液を7日間隔で数回葉面散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。